

南アルプス市立白根百田小学校関係者評価書

第1回 学校関係者評価委員会

- 1 実施日 平成22年8月31日(火) 午後5時～6時30分
- 2 会場 白根百田小学校校長室
- 3 参加者 学校関係者評価委員
小野 哲夫 小松 昭 小野 敏明 山口 泰(委員長)
小野 和明 中沢ひとみ 中澤 真司 水谷 京子
学校職員
石川 正人(校長) 大柴 俊彦(教頭) 名取みち子(教務主任)
杉山 明美(生徒指導主任)
- 4 学校から提案された内容
 - ① 学校評価システム並びに学校関係者評価についての概要説明(校長)
 - ② 学校の自己評価について説明
 - 教職員による自己評価(教務主任)
 - 児童アンケート(生徒指導主任)
 - 保護者アンケート(教頭)
- 5 協議されたおもな内容
 - ◎ 教職員による評価、児童アンケート、保護者アンケートについての考察

学校関係者評価

- 1 教職員による自己評価について
 - 現場の多忙さが数字に出ている。また、教職員が、以前はなかったような仕事を多く科せられていることが見てとれる。
 - 基礎学力の確実な定着が課題である。
 - ・基礎学力は定着するまで、繰り返し根気よく指導していくことが大切である。
 - ・子どもたちはいわゆる「こわい先生」の言うことはよく聞く傾向がある。そんな意味でも、基礎学力については、厳しい指導が必要である。
 - ・定着学習のアイデアとしては、ゲームや競争を取り入れた学習、徹底的な暗記学習、トイレの中に「九九表」の掲示などもある。参考にされたい。
 - ・保護者からの多様な要望に、教師が圧迫感や多忙さを感じているような風潮がある。基礎学力の定着に先生が全力を尽くすことができるよう、家庭が担うべきところをしっかりと担い、保護者が先生や学校を支えていくという意識を持ってほしい。
 - しっかりあいさつできる子どもの育成が課題である。
 - ・あいさつについては、家庭の影響が大きい。まずは親子でのあいさつが重要である。
 - ・北巨摩地区や、この近辺では源地区や徳永地区など、子どもがよくあいさつする地域もある。地域ぐるみの取り組みが大切である。

- ・あいさつをしたり声をかけ合うのは防犯につながり、安心感がある。防犯上からも、あいさつは重要な課題である。「皆さん、見守ってください」という地域の防犯放送も効果があるものと思われる。

2 児童アンケートについて

- （引き続き）あいさつのできる子どもの育成について
 - ・今の子は上下関係がなくなってきていて、大人に対してもあいさつとも思えないような様子が見られる。目下から目上にするのがあいさつの基本であることを教えていくことも必要である。
 - ・あいさつについて、教職員の評価と児童アンケートの結果にギャップがあるのは、子どもたちは、仲良し同士で気軽に接している状態を「あいさつをしている」ととらえているからかもしれない。どのようにすることが「あいさつをする」といえるのか、しっかり教える必要がある。
 - ・今の子は「してもらおう」という意識が強い。あいさつは、「してもらおうもの」ではなく「するもの」という意識を身につけさせたい。
- 質問や発言が苦手な子について
 - ・あいさつに関してもそうだが、いわゆる「ひっけ」の子が多い感じを受ける。地域でも自主的にしゃべる子が少ないように感じる。
 - ・子どもたちが、消極的になる要因について、つっこんだ分析がほしい。その上で、具体的な取り組みを検討されたい。

3 保護者アンケートについて

- 保護者は、責任を持って前向きな意見を出している。理不尽な学校批判ではなく、真摯な意見が出されていることが、アンケートへの記述からよくわかる。
- アンケートの対象がPTA役員だけなので、責任ある回答や意見が聞ける反面、よりよい回答を書いてしまうことも想像される。結果の読み方を考慮すると共に、全保護者へのアンケートも検討されたい。
- 保護者は、学校からのおたよりで学校の様子を知ることが多い。多忙さの中でおたよりの発行は大変なことだと想像されるが、おたよりにより保護者との連携が深まって、教育活動がよりスムーズにいくことを期待する。
- 「学校だより」の地域への回覧も有効である。地域の役員として、回覧への協力は惜しまない。
- （児童アンケート・保護者アンケートに共通して）児童や保護者に要求する水準（到達目標）を明確にする必要がある。

4 今後の課題

- 基礎学力の充実について、学校での徹底した取り組みと、保護者の学校支援
- 地域や家庭と連携した「あいさつのできる子」の育成
- 情報発信のより一層の充実と保護者との連携強化
- アンケート方法の工夫